

企業の女性研究者のひとりとして

兎玉由紀子



本コーナーへの寄稿のお話をいただき、大変名誉なこと、とついお引き受けしてしまったが、いざ自分のキャリアを振り返ってみると、転職経験ゼロ、海外赴任経験もゼロ、三十数年間一つの企業でただ愚直に働き続けてきただけで、とても人さまに自慢できるような話などなく、いまさらながら冷や汗の出る思いである。しかしながら、このコーナーの読者の方々は何も波乱万丈のキャリアばかりを期待されているわけではなかろうと思ひ直し、女性研究者として企業で働いてきた経験が少しでも若い方々の御参考になればと考え、筆を取らせていただいた。

バイオテクノロジーの世界に憧れて

私が高校生のころはまだ分子生物学やバイオテクノロジーといった分野が今ほど一般的に知られていなかったが、なんとなく高校の教科書に数行書かれている酵素反応に興味をひかれて酵素化学研究室のある京都大学の農学部に進学した。ただ、大学時代は馬術部で練習と馬の世話に明け暮れ、とてもではないがまじめな学生とは言い難かった。そうこうしているうちに4回生になり、当時は女性が大学院に進むということは企業への就職をあきらめることを意味していたので、当然のように就職を希望し、入社したのがサントリーであった。今では天然水や緑茶、缶コーヒーなどの清涼飲料のイメージが強いが、当時のサントリーはウイスキーをはじめとする酒の会社であった。そして酒だけではなく、新規事業のシーズを生み出すためにバイオテクノロジーの分野に力を入れているというところに魅力を感じた。入社後、希望通り応用生物研究所という基礎研究部門で働くことになり、私の企業人生が始まった。

入社したころ

私が入社したのは1983年、男女雇用機会均等法が施行される3年前で、当時のベストセラーはNHKアナウ

ンサー鈴木健二氏の「気配りのすすめ」。女性はどうせ結婚までの2-3年の腰掛け、職場の花、という存在で、仕事で実績を上げるよりも3時のお茶の準備や雑務をにこにこ文句も言わずにやるのがよし、という雰囲気があった時代である。学生時代は男女差というものをあまり意識しないで過ごしてきたし、「女性であっても一生続けられる仕事に就きなさい」と幼いころから父に言われて研究職を選んだつもりだったが、いざ社会に出てみると、思い描いていた世界と現実の間にはギャップがあった。入社後、一年ぐらいいは「このままでいいのだろうか?」と思ひ悩む日々が続いた。

そんなある日、思いがけなく転機が訪れた。新しくできた研究チームに加わることになり、技術導入のために社外研究機関に実験を習いに行くことになったのである。当時は女性が宿泊出張する機会さえほとんどなかったため、大阪を離れて東京に何週間も滞在することは異例中の異例だった。女性がビジネスホテルに泊まるのはよくないということで寮母さんのいる会社の宿泊施設に滞在し、週末は実家に帰るという条件でやっと出張が許された。今では信じられないことだが、当時はそんな時代だったのだ。その後はどんどん仕事を任されるようになり、仕事の面白さ、やりがいを感じられるようになっていった。以前には考えられなかった国際学会での発表や論文発表などの機会にも恵まれ、学位を取得することもできて、もはや仕事をしていくうえで男女差を感じることはほとんどなくなった。

今では国をあげて「女性活躍推進」が叫ばれる時代になり、私の会社でも積極的に女性のキャリア形成支援に取り組んでいる。上述のような昔話は若い人たちにはピンと来ないかもしれないが、男女を問わず、もし今「前例がない」ことによって新しいことにチャレンジすることのためらいがある人がいるのなら、「前例がない」ことであきらめるのではなく、「最初の一例になる」ことを目指してほしいと思う。きっと道は拓かれると信じている。



企業での研究

さて、技術系の学生にとって、企業で働くというと、商品開発や製造現場で働くイメージが強いと思うが、私の場合は入社以来ずっと基礎研究部門で基礎研究を行ってきた。最初は微生物由来の新規物質の探索や微生物の化学分類、そして後半はビール酵母の育種とゲノム解析である。自分が直接開発や製造にかかわった商品が世に出る喜びは味わえないが、そのかわり基礎研究を通じて新しい事業の種を探したり、既存製品の品質向上に間接的に貢献することができ、やりがいのある仕事であると思っている。もちろん、企業では自分の興味だけで研究テーマを選ぶことはできないし、研究の成果が将来どのように会社の利益に結び付くのか、常に考え、説明できなければならない。基礎研究は大学に任せておけばいいという考えもあるが、企業にしかできない独自の基礎研究もある。ビール酵母のゲノム解析などはその最たるものであろう。株によって異なる醸造特性がどのようなゲノム配列の違いによるものなのか？長年研究を続けているが、まだまだわからないことも多く、非常に興味深い研究対象であると思う。

また企業では、ある日突然違う部門に転勤を命じられることもある。私自身も一度知財部門への転勤を命じられて研究を離れたことがある。知財部での主な仕事は自分自身が出願した特許の技術内容を各国の特許事務所の弁理士に説明し、国ごとの特許制度に従って権利化を進めることだったが、研究を離れて違う立場で仕事をするのも経験を積むという意味では価値あるものだった。しかし、やはり自分は研究がしたいという思いが増し、異動希望を出してまた研究部門に戻ることができた。

私の会社の場合、年に一度自らのキャリアを見直す制度があり、異動の希望や将来どのようなキャリアを築きたいかを申告し、上司と話し合うことができる。もちろん必ずしも希望通りになるとは限らないが、長い人生、キャリアの描き方は人それぞれであるし、年齢を重ねるにつれて人生設計も変わってくる。キャリアを見直し、

自らの可能性を広げることができるという点でとても良い制度だと思う。

子育ては親育て

女性の働き方を考えるとき、避けて通れないのが結婚、出産、育児というライフイベントと仕事との両立だろう。私が第一子を出産したころはまだ育児休業制度もなく、生後2か月の産休明けで仕事に復帰しなければならなかったが、公立の保育所が子供を預かってくれるのは生後3か月からで、間の1か月間は実家の両親の協力で何とか乗り切ることができた。今では育休制度も整い、時短勤務など働く母親のためのサポートが充実しているとはいえ、保育所の送り迎えや子供が病気をしたときの対応など、まだまだ育児の負担は男性よりも女性のほうが大きいのではないだろうか。また、3歳までは母親が子育てに専念すべき、という「3歳児神話」のような考えによって、母親が子供を預けて働くことに対するうしろめたさのようなものから、なかなか逃れることができず、心理的なプレッシャーを受け続けることもある。

しかし、本来子育てというのはキャリアの障害ではなく、人生をより豊かにしてくれるはずである。「子育ては親育て」とよく言われるように、子供と一緒に親自身もいろいろな経験を積み重ねて成長していくのではないだろうか？私も子供たちが幼いころは毎日が自転車操業で一体どのように生活を回していたのかすら思い出せないぐらいだが、子育てを通じて学ぶことも多く、何物にも代えがたい貴重な時間を家族で共有できたと思っている。子供たちには時々寂しい思いもさせてしまったが、一方で彼らは働く母の応援をしてくれる健気な存在でもあった。そんな子供たちも今では成人し、それぞれの道を歩んでいる。よくぞここまで育ててくれた、と感無量の思いである。

おわりに

これまでの自分のキャリアを振り返ってみると、その節目、節目で支えてくれた方々の顔が思い浮かぶ。新人のころの私に「清濁併せ呑む心が大切」と諭された研究所長は、ともすれば自分の狭い価値観だけで物事を判断しがちな私の性格を見抜いておられたのではないかと思います。組織の中にはいろいろな人がいる。相手の良いところも悪いところも受け止めて、共に尊重しあうことの重要性を説かれていたのだと今更ながら理解している。また、いろいろな仕事にチャレンジする機会を与えてくださった上司の方々、協力してくれた同僚の方々、博士論

文を指導してくださった恩師の熊谷英彦先生、いつも何
かあるたびに駆けつけて協力してくれた両親、支えてく
れた家族にこの場を借りて感謝の意を表したい。

<略歴> 1983年3月 京都大学農学部食品工学科酵素化学研究室卒業。同年4月 サントリー株式会社入社。応用生物研究所、基礎研究所などを経て、2006年 知財部スペシャリスト、価値フロンティアセンターなどを経て、2014年 サントリーグローバルイノベーションセンター上席研究員、2019年4月より現職。2002年 京都大学農学部にて学位取得（農学博士）。

<趣味> 蚕の市めぐり

（イラスト：本條 綾子）